

「カスタム」をめぐる生成

——ソロモン諸島マライタ島北部の「海の民」ラウにおける社会文化的動態とアイデンティティ

*Kastom beyond Identity among the Lau in North Malaita, Solomon Islands:
Toward an Ethnography of Becoming*

里見 龍樹

SATOMI, Ryuju

1 はじめに

調査期間も終わりに近付いたある日、調査地の「島」に暮らす男性(50代)が、いかにも「お前には気の毒だが」という様子で筆者にこう言った。「お前はわれわれのカストム *kastom* について知りたくてここに来たというが、われわれのところにはカストムはもう残っていない。カストムを知りたいなら『山』(トロ *tolo*)に行った方がいいだろう」。しかし実のところ、この種の「忠告」を聞くのは初めてのことではなかった。それどころか、それは調査期間の全体を通じて、他の人々から幾度も耳にしてきたものだったのである。

この場面は、メラネシア島嶼部のソロモン諸島を構成する島々の一つ、マライタ島 Malaita Is. での筆者のフィールドワークから採られたものである。ここで言う「島」は、マライタ島北東部に住む、ラウ Lau または「海の民」(アシ Asi) と呼ばれる人々が、同島沿岸のサンゴ礁の中に築いてきた人工の島々の一つであり、筆者のフィールドワークは主に、このラウ／アシの人々における独自の海上居住の現状を明らかにしようとするものであった¹。他方、上で言われる「山」は、ラウ／アシと対比される「山の民」(トロ Tolo) が居住する、マライタ島本島の内陸側の地域を指している。

上の男性の語りにある「カスタム」は、英語の「慣習 *custom*」に由来するピジン語表現で、「在地の慣習、伝統文化」およびこれに関連する諸事象を指すものとして、現代のメラネシア各地で日常的に用いられている。1980～90年代のオセアニア人類学では、筆者と同じマライタ島を調査地とするキージング (Roger M. Keesing) を編者の一人とする論集 [Keesing and Tonkinson 1982] を端緒とし、「カスタム」あるいはそれに類する概念に表現された、オセアニア各地の人々による自文化の客体化・対象化の動きに注目する研究が盛んに行われた。本稿が便宜上「カスタム論」と総称するこれらの研究は、民族誌の対象としての文化の動態性・構築性や、(自)文化の対象化における現地の人々と人類学者の営みの並行性を主題化するものとして、オセアニア人類学におけるポストモダニズム／ポストコロニアリズムの主要な形態をなしていた。

1 本稿のもととなった調査は、2008年3～4月、2008年8月～2009年1月、2009年4～10月、2011年6～10月の合計15.5か月に渡り、マライタ島およびソロモン諸島国首都ホニアラ Honiara で行われた。

90年代初頭以降のカストム論では、ジョリー (Margaret Jolly) とトーマス (Nicholas Thomas) による論集 [Jolly and Thomas 1992] に代表されるような、「伝統文化の客体化」の背景として、植民地主義の歴史や地域社会内における対立・抗争関係にもっぱら注目するアプローチが支配的となる [e.g. White and Lindstrom 1993]。そのような歴史的かつ政治的な分析の定型化が進むにつれ、2000年代以降、「カストム」への人類学的関心は次第に低下してきたように見えるが、他方で、現代のメラネシアの人々にとって、この観念が重要なものであり続けていることに変わりはない。

注目すべきことに、上で紹介した男性の語り——しかも、同様な語りは現在のラウ／アシの人々によってしばしばなされる——は、いくつかの点で、「カストム」についての通常的人类学的理解を裏切るものとなっている。すぐ後であらためて問題にするように、「カストム」は、従来の多くの議論において、集団的なアイデンティティ (同一性) の象徴あるいは媒介物として、メラネシアの人々によって通常肯定的・積極的に主張される対象とみなされていた。これに対し、上のようなラウ／アシの語りでは、「われわれのカストム」と呼びうるものの存在が否定されるとともに、固有の「カストム」の集合的な担い手としての「われわれ」の同一性——「ラウ／アシ」としての同一性——が潜在的に疑問に付されている。また、「われわれのところではなく『山』で調査をした方がいい」という忠告は、「ラウ／アシ」という同一性をもった集団とその (伝統) 文化を対象とするフィールドワーク、という人類学者の側の慣習的な想定を直接に問題化するものである。

本稿は、このような語りに示された、現在のラウ／アシにおける「カストム」をめぐる意識——この人々と調査者の双方を、ある種不安定な関係の中に巻き込むような——について検討することで、従来のカストム論の限界と、それに代わる新たな論じ方について考えようとするものである。以下でのねらいはとくに、現代のラウ／アシの、「われわれはカストムをすっかり失ってしまった」という一見消極的で悲観的な意識の根底において、ある種潜在的なかたちで生じている、既存の集団的同一性や自己／他者関係を不断に超え出ていくような動き——以下で「生成becoming/devenir」として概念化するところの——について明らかにし、現代の人類学におけるその理論的な意義について考えることにある。

II 「カストム」をめぐる自己同一性と「生成」

すぐ上で述べたように、ラウ／アシの事例は、従来のカストム論

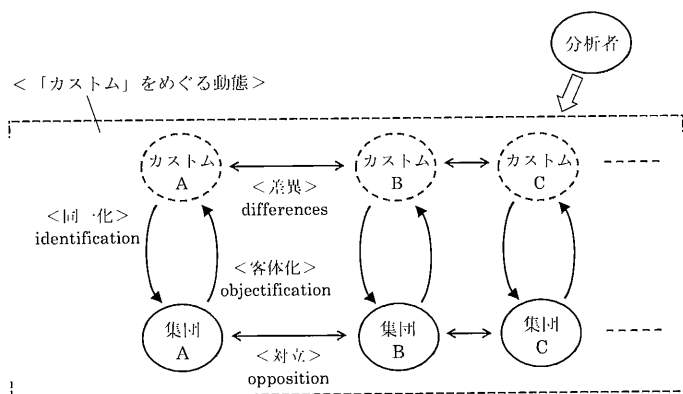


図1：カスタム論における「対立／同一化」の構図

2 本稿では以下、すぐ後で述べるような理論的・概念的な議論との関連を示すため、心理学的なニュアンスをともなう「アイデンティティ」に代えて「(自)同一性」という表現を用いる。

における、集团的同一性（アイデンティティ）の象徴・媒介物としての「カスタム」という分析視角に対し、疑問を投げかけるものと思われる。そうした視角は、80～90年代の論者に一般的に共有されていたものであり、たとえばトンキンソン（Robert Tonkinson）は、独立期（80年前後）のヴァヌアツの事例に関し、「カスタムは、個人から国民までのあらゆる水準において、アイデンティティと密接に結び付いている」[Tonkinson 1982: 302]と強調している。またトーマスは、「伝統の客体化」を、前植民地時代の交易や植民地体験における、他集団との「対立的oppositional」な関わりを通じた集団の自己同一化という視点から分析している[Thomas 1992]。トーマスにおいて、たとえばフィジー、トンガ、サモアの人々は、前植民地期に相互の長距離交易に従事する中で、それぞれの刺青の仕方の違いを、自他の区別と集团的アイデンティティの象徴として掲げるに至ったとされ、また、植民地時代における海外プランテーションでの労働体験は、メラネシア各地の人々に、植民地主義的な社会関係と対比される自社会の「伝統的」生活という観念を抱かせたと指摘される[Thomas 1992: 216-219]。

これらの分析に共通に見出されるのは、人々が、他者との対立的な関係の中で、自他の間に顕著に認められる差異を「カスタム」として客体化し、さらにそのような客体を、「これこそがわれわれのカスタムだ」として引き受け直すことで、集団としての自己同一性を構築または再強化する、という構図である（図1参照）²。主に90年代の議論で強調された、「植民地主義の歴史」や「集団間の政治的・経済的抗争」といった枠組みは、いずれも「対立」と「同一化」からなるそうした過程の具体例に他ならない。また多くの論者は、（自）文化の客体化における現地の人々と人類学者の営みの並行性を認識しつつ、実際の分析においては、「カスタム」をめぐる歴史的ある

いは政治的過程の総体を超越的な視点から観察・記述する人類学者、という伝統的な想定を維持していた。これらの結果として生み出されてきた分析に、メラネシアの人々を他者との対立的関係と自己同一性の内部に閉じ込めるかのような、息苦しさの印象がしばしばつきまといってきたことは否定しがたい。

「カスタム」をめぐる従来の分析が抱えていたこうした問題について考える上で、近年の一部の人類学者における、「生成」の概念——直接には哲学者ドゥルーズ (Gilles Deleuze) に由来する——への理論的関心が参考になる [e.g. 箭内 2002; Jensen and Rødje 2010]。主に 80 年代以降の人類学において、対象としての社会・文化を動態的にとらえるという課題はごく一般的に共有されており、カスタム論も、オセアニア人類学におけるそうした取り組みの一形態といえる。しかしなお多くの議論は、すでに境界付けられ同一化された状態や集団を前提とし、それらの間のあくまで外的な関係を、「歴史的变化」や「政治的過程」などとして分析するにとどまってきたように思われる。「生成」の概念は、対象を所与の同一性——「～であること to be/être」——の下に固定化するような枠組みを離れ、人々が、既存の自己同一性を超え出て、何か別の、新しいものの「になろうと to become/devenir」するような動きをとらえようとするものであり、そこでは、変化・動態を従来とは大きく異なる仕方では概念化することが試みられている。

一例として、ドゥルーズ哲学の人類学への援用の主導者の一人であるヴィヴェイロス・デ・カストロ (Eduardo Viveiros de Castro) は、南米アマゾン地域の先住民アラウエテ Araweté のコスモロジーと社会観についての民族誌 [Viveiros de Castro 1992] の中で、「未開社会」を、自らの同一性をつねに維持・再生産しようとする社会とみなす古典的な人類学の想定を、根底的に批判している。彼によればアラウエテ社会は、そうした想定とは対照的に、つねに自らの外部に向かい、自らとは異なるものになろうとする衝動に特徴付けられている [Viveiros de Castro 1992: 3-4]。

アラウエテ社会にとっての外部あるいは「他者」とは、具体的には、神々や霊的存在、「白人」をも含む異民族・他集団、あるいは動物を意味する。古典的な人類学においてならば、これらの「他者」と人々との関係は、たとえば特定の動物種との供儀的・トーテムの関係、あるいは「白人」との植民地主義的な支配／被支配関係といったかたちで、問題の集団の自己同一性を構成・再構成する弁証法的な契機——「自己の鏡像としての他者」あるいは「主体の鏡像としての客体」の契機——として位置付けられることになる。

これに対しヴィヴェイロス・デ・カストロは、アラウエテのコスモロジーが、生者としての人間を、根本において中間的な、移行途

中にある存在と規定した上で、人間が死後、神々という他者によって食われることで自ら神々になるという「神々による食人」の原理によって、自己(人間)と他者(神々)を結び付けていることを指摘する。また彼によれば、同種の関係はアラウエテにおいて、他集団や動物、植民者などさまざまな「他者」との間にも見出される。アラウエテのコスモロジーと社会観は、「同一化の問題を、他への変成alterationの問題によって置き換える」[Viveiros de Castro 1992: 271]独自の食人の原理、あるいは自己が不断に他者になるという「生成」の関係に基づくものとして理解されるのである。

注目すべきことに、ヴィヴェイロス・デ・カストロが提示するような「生成」の概念は、「カスタム」をもっぱら集団的同一性の象徴あるいは媒介物として分析してきた従来の議論を直接に批判するものとなる。先に指摘したように、これまでのカスタム論の多くは事実上、メラネシアの人々を、他集団との対立および客体としての「カスタム」との同一化を通じた、集団的同一性の構成と再生産の過程の中に閉じ込めるものであった。これに対しヴィヴェイロス・デ・カストロの民族誌は、他者や客体との関係が、必ずしもこのように自己同一性へと還元されるものではないこと、それどころかまったく逆に、アラウエテにとっての「食人者としての神々」がそうであるように、他者／客体との関係を通じて所与の自己同一性が乗り越えられ、人々が異なるものになろうとするような「生成」的な関係というものがあろうことを示唆しているのである。

3 1999年の国勢調査で、ラウ語を第一言語とする人口は16,900人余りと推計されている[Statistics Office c2001: 170]。ラウ／アシに関する先行研究としては、1927年の滞在に基づくアイヴエンズ(Walter Ivens)の報告[Ivens 1978(1930)]、マランダ(Pierre Maranda)らの象徴人類学的研究[Maranda and Kōngās Maranda 1970]、漁業や生態知識に関する秋道の研究[秋道 1976]などがある。なお、以下で検討する民族誌的事実の一部については、別稿[Satomi, in press]で、マライタ島やメラネシアの他地域との比較など、より地域研究の文脈に即したかたちで論じている。

III マライタ島北部のラウ／アシにおける「カスタム」

1 ラウ／アシとその人工島居住

以下での課題は、人類学的な「生成」論の以上のような示唆を踏まえ、現在のラウ／アシにおける「カスタム」をめぐる動態を、「対立」と「同一化」からなる従来の枠組みから自由な形でとらえることにある。ここで民族誌的な背景について確認しておこう。冒頭でも触れたように、マライタ島北部の人々は、居住地と生業のおおよその違いに基づき、自他を「海の民 *Too 'i asi* / 山の民 *Too 'i tolo*」——日常的には、単に「海／山地」を意味する「アシ／トロ」の略称が用いられる——に区別してきた。このうち、同島北東海岸部および海上に居住する、言語集団としてはラウと呼ばれる人々は、活発な漁撈と市場交易に従事する「海の民」(アシ)として知られている³。

このラウ／アシの人々はまた、先にも触れたその独特の海上居住形態、すなわち、マライタ島北東岸に沿って南北30km以上に渡り細長く広がる、今日ラウ・ラグーン Lau Lagoon と呼ばれるサンゴ

4 本稿では、簡潔さのために、既存文献における「人工島」という呼称を採用する。なお、現地語ではこれらの島は「海にある村・住み場所 *fera 'i asi*」と呼ばれる。

5 以下では、先行研究[e.g. Maranda and Kōngās Maranda 1970]にならい、アシの父系出自集団「アエバラ *'ae bara*」を「氏族」と呼ぶこととする。

礁内に、海底で採取される岩石状のサンゴの碎片を積み上げて築いた人工の島々に関してもその名を知られてきた。現在この地域には、居住人口数百人からわずか1家族までという大小の規模をもつこうした「人工島 *artificial islands*⁴」が90個あまり分布しており、冒頭で紹介した場面も、そのうちの一つ、a島の上でのものである。本稿では以下、マライタ島北部においてより日常的な用法に従い、主に言語区分に関わる「ラウ」に代えて「アシ」という集団カテゴリーを用いるが、このカテゴリーは、このような海上居住を集合的に営むことを通じて、ラウ・ラグーンの「海」(アシ)を自らの居住空間としてきた人々を指示するものに他ならない。

筆者の調査拠点であるT村は、本稿でいう「アシ地域」、すなわちいわゆるラウ・ラグーンとその沿岸の北端に近い、本島海岸部に位置する集落である。1935年にカトリック教会が設置され、現在でも司祭が常駐するT村は、学校や診療所を備え、中心部には約40世帯260人が居住する相対的に大規模な集落となっている。また同村の西側(内陸側)は、現地で言われる「トロ」(山の民)の居住地域、すなわちバエレレア *Baelelea* 語地域に接しており、冒頭の語りで、a島の男性が筆者に「カスタム」についての調査先として薦めた「山」(トロ)とはこの地域を指すものである。

他方、T村の沖合には、調査時点で16個の中～小規模の人工島が、海岸線からそれぞれ数百m離れて点在している。うちa島を含む10個には、現在でも合計で190人ほどの人々が居住しており——他方、6個は放棄され無人となっている——、これらの人々は、サツマイモを中心とする自給用の耕地がある本島海岸部との間を、カヌーで日常的に行き来して生活している。本稿では以下、T村と沖合人工島群を一括して「T地域」と呼ぶこととするが、同地域の人々は今日、多くの場合、現在人工島に居住しているか否かに関わらず、全体として「アシの人たち *Asi gi*」と呼ばれ、また自称している。

現地での聞き取りによれば、現在のT村沖に見られる人工島の多くは、アシ地域で西洋世界との継続的な接触——当初はいわゆる労働交易 *Labour Trade* [Corris 1973] を通じた——が始まった19世紀末以降に、主としてT地域より南方の、既存の人工島群から移住してきた人々により建設されたものである。他方、人々によれば、現在見られるような集住地としてのT村は、1970年代後半から80年代にかけ、数度に渡るサイクロン被害をきっかけとして、人々が人工島群から本島海岸部に移住する過程で漸進的に形成された。それ以前、現在T村がある海岸部には、カトリック教会の他は、今日でもこの土地の慣習的所有者とみなされているT氏族⁵の人々がわずかに数世帯を構えていたにすぎず、他方、多くの人々は沖合の人工島群に居住していた。なお、以上のような移住史は、

後述のように、その結果として今日見られる特徴的な居住空間や景観とともに、現在のT地域における「カスタム」の観念を大きく規定するものとなっている。

2 集団的同一性としての「アシ」の現状と「カスタム」

現在のアシ地域で言われる「カスタム」は、もっとも基本的には、「キリスト教が一般的に受容される以前の祖先たちやその生活と結び付いた、さまざまな事物や知識、慣習」と定義することができる。「カスタム」という表現は現在、もっぱら現地語を用いた会話の中でも、いかなる単一の現地語にも置き換えることのできない固有の意味内容をもつものとして、日常的に用いられている。アシの人々はもともと、祭司 *aarai ni foa* が行う豚の供儀など諸種の儀礼をともなう祖先崇拜を行っていたが、20世紀を通じて——T地域の場合、30年代からおおよそ70年代まで——キリスト教の受容が進み、現在では形式上、ほぼすべての人がいずれかの教会で洗礼を受けている。キリスト教受容による歴史的・文化的な断絶の意識は、メラネシアの他の多くの地域と同様、現在のアシ地域において、主に「教会 *lotu*」と対比される「カスタム」の観念を構成する主要な契機をなしている。T地域の場合とくに、70年代における、いくつかの氏族の祭司の死による祖先崇拜の実質的断絶と、すぐ上で述べた沖合人工島群から現在のT村への移住とが時期的に重なり合っており、このことは、現在の同地域における「カスタム」観念、とくにその人工島との関係にも大きく影響している（V節の2参照）。

アシの人々の現状を理解する上での「カスタム」観念の重要性は、現在のこの地域において、人工島という居住形態に対する意味付けが不安定になるとともに、それと不可分な「アシ」という集団的同一性が、この名で呼ばれてきた人々自身によって潜在的に問題化されつつあるという状況に関わっている。すなわち、別稿で詳述したように、現在「アシ」と呼ばれる人々は、自分たちの祖先はもともと、「トロ」すなわちマライタ島内陸部の各地に居住していたのだが、それぞれの氏族の祖先が移住を繰り返す過程で、人工島を建設し海上に居住するに至った、という認識を共有している〔里見 2011〕。こうした認識は、それぞれの氏族の父系的祖先の移住——「トロ」から「アシ」への——に関する一群の伝承 *'ai ni mae* を根拠とするものであり、主にキリスト教受容以前の祖先に関わるこれらの伝承は、今日「カスタム」の主要な一部をなすものとみなされている。

これに対し、現在のアシ地域では、人口増加による海岸部での土地不足への不安や、2000年前後のソロモン諸島におけるいわゆる「民族紛争 *ethnic tension*」などを背景として、人々は、人工島を含め現在の居住地を離れ、「トロ」の各地にある祖先たちの「故地 *'ae*

fera」に帰るべきだ、あるいは近い将来にそうすることを余儀なくされるという意識が、広く共有されるようになっている。このような意識は、一つには、上で述べたような移住史の結果として、アシの人々が通常、現住地に近接するマライタ島本島海岸部に土地を保有していないという事情(IV節の2参照)と関わっている。たとえば今日のアシ地域で、「人工島には畑を作ることもできない。だからわれわれはさと fera(「故地」を指す)に戻ろうと思う」という語りを聞くことは珍しくない。

このように、現在のアシ地域においては、人工島という居住空間が「われわれの住み場所」としての自明性を失うとともに、それとの結び付きによって「アシ」と呼ばれてきた人々の集合的な同一性も、潜在的に相対化されるに至っている。冒頭で紹介した、「カスタムについて知りたいなら、われわれのところではなくトロに行け」という今日しばしば聞かれる語りも、「アシ／トロ」関係のこのような再規定と、その下での、上述の移住伝承をその重要な一部とする「カスタム」の問題化を背景としてなされているものに他ならない。

3 従来のカスタム論との不適合

このようなアシの現状は、先にも示唆したように、「カスタム」をめぐる従来の議論に対し決定的な不適合を呈している。すなわち、現代メラネシアにおける集団的同一性の象徴あるいは媒介物としての「カスタム」という従来の理解に対し、現在のアシにおいてはむしろ上のように、移住伝承その他の「カスタム」が引き合いに出されることで、「われわれは人工島に住むアシである」という自己同一性が、当のアシの人々にとって自明性を欠いたものとなされている。「カスタム」は、「アシ」という同一性を他の集団との区別・対立において強固にするどころか、まったく逆に、それを揺り動かし、不安定化させるものとして働いているのである。また、「トロ」の「故地」に関わる系譜や移住史を明確化しようとする際には、そうした「カスタム」の担い手としての氏族の境界や同一性が不可避的に問い直される以上、同様な事態はより個別的な集団に関しても指摘できる。

このような状況を分析する上で、従来のカスタム論における「他者との対立的関係を通じた自己同一化」という図式は明らかに不十分である。先に見た「生成」の概念は、まさしくここにおいて、自己同一性へと回収されないアシの「カスタム」観念の動態を記述するために要請される。より直接的に言えば、ヴィヴェイロス・デ・カストロが記述する上述のアラウェテの人々とアシの現状の間には、あくまで部分的ながら注目すべき類似性が認められる。すなわち、アシの人々は現在、後述するような独自の権威や具体性を帯びた「カスタム」という他者／客体との関わりにおいて、集団としての自己

同一性を再生産するどころか、あたかもアラウェテと「食人者としての神々」の関係を思わせる仕方で、不断に現在の自己とは異なるものになろうとする動き——まさしく「生成」として概念化されるべき——を示しているように思われるのである。

本稿では以下、現在のアシ地域で「カスタム」をめぐる生じているそのような動きを、アシにおけるこの観念を特徴付ける独特の両義性に注目して記述する。すなわち一方で、現在のマライタ島北部においてアシは、いくつかの事情から、「トロ」の人々との対比において、「カスタム」から相対的に切り離された人々とみなされており、アシの人々自身も、多くの場合そうした見方を受け入れている(IV節)。しかし他方でこの人々は、とくに人工島という独自の居住空間に関して、現在なお「カスタム」とのある種密接な、かつしばしば不安や困惑を覚えさせるような関わりをもっており、決して単に「カスタムを失った人々」としてあるわけではない(V節)。そして、上で指摘したような、「アシ」という同一性をめぐる「生成」の動きは、一面でたしかに、「カスタム」のこのような両義性に媒介されて生じているものと思われるのである。

IV 「カスタム」から切り離されたラウ／アシ

1 「カスタム」との否定的・消極的關係

すぐ上で第一の側面として述べた、「カスタム」から相対的に切り離された人々としてのアシという見方は、今日のマライタ島北部でごく定型的に語られるものである。たとえば、T村近隣の「トロ」の人々は、先述のように全体として「アシ」とみなされるT地域の人々について、「あの人たちはカスタムを知らない *Gera lafusia kastom*」、あるいは「あの人たちはカスタムに従って暮らしていない *Gera si too sulia kastom*」といった批評をしばしば述べる。ここで問題にされているのは、先に述べたような伝承・系譜や、伝統的とされる慣習・規範についての知識が、T地域の人々において時に乏しく、または混乱して見えること、あるいはまた、同地域の人々が、漁業を通じた現金収入と米などの輸入食品——人々の言う「白人の食べ物 *fanga aarai kwao*」——に相対的に大きく依存し、「カスタムに従った生活 *toolaa sulia kastom*」の主要な一部としての自給的農耕をおろそかにしているように見えることなどである。

マライタ島北部に特徴的なのは、「トロ」の人々におけるこのような見方を、「われわれのところにはカスタムは残っていない」という先の語りが端的に示すように、アシの人々自身が実質的に受け入れていることである。現在の同地域において、アシと「カスタム」

を肯定的・積極的に結び付ける言い方——「アシにはアシのカストムがある」あるいは「もともとあった」というように——がなされることはごく例外的であり、人工島についても、それを「われわれのカストム」と積極的に意味付ける語りに接することはほとんどない。T村のある男性(40代)は、筆者との会話(2008年10月)の中で、キリスト教受容以前のアシ地域における慣習の多く、たとえば月経・出産時の女性の空間的隔離などが「トロ」地域と共通であることを指摘して、「アシの人たちはトロから来たので、もともとトロにあったカストムを海岸部や海[すなわち人工島上]で続けていただけた」と説明した。これらの語りは、現在のマライタ島北部において、「カストム」が通常「アシ」という同一性と否定的・消極的にしか結び付けられないという傾向をよく示している。

2 移住史、土地と「カストム」

アシが現在、このように「カストム」から切り離された人々とみなされる理由としてはまず、この人々が、地理的条件のために、「トロ」の人々と比べ、西洋世界からより早期の、かつ大きな影響を受けてきたとされる——メラネシアの海岸部や島嶼部について一般に指摘されるように——ことが挙げられる。加えて重要なのは、先にも述べたような、今日「アシ」と呼ばれる人々の移住の歴史、および「カストム」の「土地」の観念との結び付きというイデオロギー的な事情である。

ヴァヌアツにおける「マン・プレース *man ples*」——英語の *man* と *place* に由来するピジン語——の観念、すなわち「土地／場所に根ざした存在としての人間」という規範に関してジョリーが指摘するように、「カストム」の観念は一般に、西洋世界との接触や植民地化による社会変化、具体的には土地の譲渡や都市への人口移動との対比において、「祖先伝来の土地との結び付き」という価値を本源主義的に強調する傾向を持つ [Jolly 1982; cf. Keesing 1982; White 1993]。これに対しアシの人々は、海上居民として単に土地の上に住まっていない(いなかった)というのみならず、主に先住権に基づくマライタ島の土地慣習の下では、同島各地からの移住者として、多くの場合、人工島に近接する海岸部に土地を保有していない。アシが現在、総体として、「自分たちの土地」から切り離され、したがって「カストムに従った生活」から切り離された人々とみなされるに至っているのは、一つにはこうした事情のためである。

なお、現在海岸部に居住する人々が、西洋世界からの相対的に早期の影響により「カストムを失った人々」と見られていたり、また内陸部からの移住史の結果として「祖先の土地から切り離された人々」とみなされていたりする状況は、今日のメラネシア地域ではおそら

く珍しくない。これに対し、アシの事例が特徴的なのは、そのような「祖先の土地」からの切り離しや「カスタムの喪失」ということが、既存の集団が帯びることになった外的で偶発的な属性であるというよりは、反復的な移住の中で海上居住を営んできた人々としての「アシ」という同一性それ自体に組み込まれているという点においてである。また、以上で「アシ」という同一性について指摘したことは、人工島という居住空間そのものについても当てはまる。すなわち、先にも見た、「人工島には畑を作ることもしないで、われわれはトロに帰ろうと思う」という定型的な語りが示唆するように、現在のマライタ島北部では、人工島という居住形態それ自体が一面において、アシの人々が「自分たちの土地」に住んでおらず、したがって「カスタム」から切り離されていることの物証として見られている。今日アシの人々が、人工島居住を積極的・肯定的に「われわれのカスタム」と語ることがほとんどないという先に述べた事情も、そのことの表れといえるだろう。

3 景観体験における「カスタム」

なお、「カスタム」から切り離された「アシ」という以上のような見方は、単に観念や語りの水準にとどまらず、アシの人々の日常生活における具体的な経験あるいは実感に、一定の裏付けを得ているように思われる。たとえば、現在のT地域に見られる居住空間や景観、すなわち本島の海岸部に大規模な集住地があり、その沖合には一部が無人工島が点在しているという状態は、歴史的に見ても、また現在の近隣地域との比較においても、決して他に例のない、きわめて特徴的なものである。そして同地域の人々は、まさしくそうした独特な景観・居住空間の中に暮らすことの具体的な経験のゆえに、自らが「カスタム」を失っているという見方を受け入れざるをえなくなっているように見えるのである。

たとえば現在のT地域では、人口の集中と増加の結果、T村の周辺に耕地が密集し、従来のような自給的焼畑農耕の継続が困難になりつつある、という認識が広く共有されている。T村に住むもと人工島居住者の女性(50代)は、筆者が畑に同行したある日(2009年7月)、同村西側の、一面に広がる耕地の中に立ってあたりを見回し、あらためて気付いたかのように、「おやまあ、このへんには茂みがないねえ」とつぶやいた。一見些細なこの言葉は、2～3年ごとの休耕と耕地の移動を前提とする自給的農耕が、現在のT地域において事実上継続不可能になっているという、言うなれば「カスタムに従った生活」の危機についての認識を含意するものである。

T地域の人々は今日、この地域の景観や居住空間の日常的な体験の中で得られるこうした認識のために、自分たちは「祖先たちの土地」

6 「カスタム」のこのような含意・用法は、90年代の「政治学」的な議論では必ずしも前景化されていなかったが、これまでもメラネシア各地から報告されている[e.g. Lindstrom 1982; Burt 1982; White 1993]。

における「カスタムに従った暮らし」から切り離されてしまっている——そして、現金収入や輸入食品に依存した「白人のような *mala aarai kwao*」暮らしを営むに至っている——という見方を、受け入れざるをえなくなっているように見える。そして先に述べた、アシ地域を離れ、「トロの故地へ帰る」という現在の志向は、一面でまさしくこうした感覚・認識によって動機付けられているように思われるのである。

V 「カスタム」の形象としての人工島

1 人工島上のバエ *bae* と「カスタム」

「カスタム」との以上のように消極的な関係はしかし、この観念をめぐるアシの現状の一面に過ぎない。次に問題にしたいのは、前節で見たような見方に一見矛盾するかのように、アシの人々の間に、人工島それ自体をある意味で「カスタム」を具現化するものとして見るような意識が認められるという事実である。このことを、ここではまず、今日多くの人工島上に見られる「バエ *bae*」と呼ばれる空間に関して見ることにしたい。

バエは、キリスト教の一般的受容以前——T地域ではおよそ70年代前半まで——のマライタ島北部で、祖先崇拝の儀礼や埋葬が行われていた空間であり、今日では本島や人工島上に、暗く大きな茂みのかたちで残されている。人工島を含む新たな場所への移住・定着に際し設置されたバエは、先に述べた移住伝承とも不可分であり、「カスタム・サイト *kastom saet/kastom site*」というピジン語の呼称が示唆するように、現地の人々により、「カスタム」を強く具現する空間とみなされている。ここでの「カスタム」は、先の定義(Ⅲ節の2参照)の通り、非キリスト教的な霊的存在としての祖先たちおよびそれらとの関わりの領域を意味するが、この場合とくに、そうした霊的存在は、キリスト教徒である現在の人々にとって、潜在的な危険あるいは脅威をなすものとみなされている⁶。このような脅威は通常、キリスト教的生活と「カスタム」の領域の区分・境界を侵すことに対する、祖先たちの怒りと懲罰の可能性として理解されている。今日、バエには通常立ち入るべきではないとされており、違反がなされると、「機嫌を損ねた *rakena ka hasu*」祖先によって、違反者自身やその親族に病や死がもたらされるとされる。

一例として、a島のバエ——本稿冒頭の語りはそのすぐ傍らでなされた——に関しては次のような出来事が知られている。92年、この島に伝わる祖先崇拝の一部——その他の主要部分はすでに70年代に断絶していた——を継承していた補助的な祭司の男性が亡く

なると、すでにキリスト教徒となっていたこの男性の息子たちは、祖先崇拜の継承から逃れるために、本来は他の祭司によって「カスタムに従って」埋葬されるべきこの父を、a島のバエの内部にキリスト教式に——司祭を招き、祈祷を行って——埋葬した。2000年代前半、この変則的な埋葬の中心となった、亡くなった男性の次男(2011年9月、50代で没)は、2人の10代の娘を相次いで亡くすが、彼は生前(2009年5月)、これらの娘の急死を、父の埋葬の際の「過ちgaro」、具体的には「カスタム／教会」の境界付けへの違反によるものと筆者に語っていた。同種の災いのエピソードは、より劇的でないかたち——たとえば、好奇心でバエに立ち入った少年の、直後の原因不明の急病というような——においてならば、今日のマライタ島北部である程度日常的に語られるものである。

このように「カスタム」と結び付けられる人工島上のバエは、先にも問題にした、現在のアシ地域の居住空間・景観の中で、注目すべき一要素をなしている。すなわち、同地域の海上は、晴れた日には数km先まで見通せるくまなく明るい空間であり、そうした見通しのよさ——「遠くまで、よく見える *ada tau, ada folaa*」こと——は、アシの人々により、四方を二次林に囲まれた「トロ」の居住空間との対比としてしばしば語られる⁷。現代のメラネシアにおいて、内陸部と海岸部のこのような景観上の対比は、しばしば「非キリスト教的(すなわちカスタムの)世界／キリスト教化された世界」という歴史的・文化的な対比として概念化されており、マライタ島北部における「トロ／アシ」も一面でこれに合致する。これに対し、人工島上のバエは、アシ地域の明るい海の上にありながらその中がツネに暗い茂みとして、景観上特異な空間をなしている。

加えて、人工島上のバエは、人工島および本島海岸部に住む人々にとって、あくまで空間的に身近な対象としてある点でも特徴的である。たとえば先に述べたa島では、30m四方に満たない小さな島の上に、そこに立ち入ったら災厄が生じるとされる——それどころか、現に過去に重大な災いを生じさせてきた——ような、居住者にとって潜在的な脅威をなす空間としてバエが保存されている。また、本島海岸部に住む人々にとっても、これらのバエは、海岸部、または漁撈などに出る海上から、すぐ近くに見える対象である。「カスタム」から切り離されていることを自他ともに認めるアシの人々は、他面において逆説的にも、人工島上のバエに具現された潜在的脅威としての「カスタム」と、このようにある種身近に、日常的に接しているのである。

2 人工島をめぐる過去と現在

以上のような、キリスト教化以前の祖先たちに関わる霊的な力や

7 陸上ではあるが、先述の、一面に広がる耕地のように相対的に開けた空間をもつT村は、言うなれば両者の中間に当たる。

脅威という意味での「カスタム」との結び付きは、注目すべきことに、バエだけでなく人工島全体にまで一般化して指摘されうる。人工島と「カスタム」のそのような関連は、過去のアシ地域でしばしば行われてきた、人工島それ自体にキリスト教的な「祝別 *faa-abual blessing*」を施すという手続きによく示されている。

たとえばa島では、先にも言及した、この島に関わる祖先崇拝を継承していた最後の男性が92年に亡くなった後、当時の島の中心的な男性たちの依頼を受けて、T村のカトリック教会の司祭が、この島自体にキリスト教的な祝別——具体的には、祈禱を行い、「聖水 *kafo aabu*」を撒きながら島を一周するという手続き——を施したとされている。人工島上の空間をキリスト教的に再定義するこのような手続きが必要と考えられたこと自体、埋葬を含む非キリスト教的な慣習や禁忌がそれまで行われていたa島の空間が、内在的に「カスタム」の性質を備えたものとみなされていたことを示している。

なお、a島上には現在でもバエがある以上、この島全体が司祭によって祝別されたかのような語りにはあいまいさがつきまといている。このことが今日なお、当のa島に関わる人々にとって懸念としてあることは、この祝別の後、同島居住者の親族のある男性（現在40代、T村在住）が、祖先の怒りのために数年間に渡って精神異常に陥ったという出来事の語りによく示されている。a島現住のある男性（60代）は、筆者にこの出来事について語った際（2009年5月）、「カスタムが機嫌を損ねて」この男性を害したのだと述べた。この語りは、現在のアシの人々における、人工島それ自体を「カスタム」の具現化とみなし、人工島に対する「間違った *garo*」関わりが災いをもたらしうるものとする意識を明確に示している。

人工島がこのような意味で「カスタム」の具現化とみなされることには、いくつかの理由が考えられるが、もっとも根本的と思われるのは、人々の言う「カスタムの時代 *kada kastom*」から現在に至る、人工島の他ならぬ物質的持続性という契機である。すなわち多くの人工島は、キリスト教の一般的受容以前に、祖先崇拝と結び付いた一連の慣習や禁忌が行われる場として建設されながら、そうした「カスタムの時代」が終わった現在になっても、通常は消失することなく物質的に存続し、またしばしば上述の祝別のような再定義を経て住まわれ続けている。その結果として、現在のアシの生活空間には、非キリスト教的な慣習のほとんどは行われなくなり、またかつての人工島居住者の一定数は本島海岸部に移住しているにもかかわらず、人工島がそこ、具体的には本島沖合数百メートルの海上にあることは変わらないという、ある種の食い違い——再び空間的あるいは景観上の——が生じている。先に見たバエの存在は、そうした食い違いのもっとも極端で象徴的な表現であり、また、上で述べたa島の

祝別に関わる災いのエピソードも、非キリスト教時代から持続する人工島という物質的・空間的な条件の下で可能となっているものに他ならない。

このような食い違いは、先にも述べたように、70～80年代における本島海岸部への移住と、人工島群における祖先崇拝の事実上の断絶とが時期的に重なり合っているT地域において、しばしば顕著な問題性をもつ。たとえば、T村に住むある男性(60代)は、一部の人々の間で、この村の土地を慣習的に保有するとされるT氏族に代わる、「本当の」先住氏族の生き残りではないかと見られており、現在のT地域の親族関係においてとくに問題含みな立場にある。しかし、この男性の父系的な近親者は今日のT地域にはおらず、彼自身、そのような立場を確証する系譜的知識をもたないため、事態は不明確なままになっている。

この男性において、自身の親族関係上の立場のこのようなあいまいさは、彼が80年代初頭に家族とともにそこから移住してきたu島の存在と不可分なものとして理解されている。u島は、この男性の父方祖父が、30年代と推定される時期に建設した人工島であり、現在は無人となり樹木が茂り放題になっている。この男性は、「カスタムの時代」に、祖父らは何らかの重大な出来事、具体的には、「オメア omea」と呼ばれる氏族間の戦闘や、禁忌に違反した養取関係といった出来事と関わり合ったのではないかと、そしてそのために、自身を取り巻く現在のT地域の親族関係・土地所有関係が不明確になっているのではないかと、という漠然とした認識を筆者に語っている(2009年7月)。彼によれば、祖父が、もともと住んでいた現在のT村の土地から、新たに建設したu島に転出したのも、おそらくこれらの出来事を受けてのことである。また彼は、自身の弟が80年代にトラック事故で若くして亡くなったことも、「カスタムの時代」におけるそれらの出来事に含まれていた「過ち」の帰結であったものと見ている。

この男性の語りにおいて、現在のT地域で通用している社会関係がどこか「正しくない *langi si 'o'olo*」のではないかと、また、自身の父系親族に関わる「カスタムの時代」の「過ち」が解消されないままになっているのではないかという感覚は、u島の存在へと繰り返し結び付けられる。この島は彼において、「カスタムの時代」から現在へと持続していながら、問題の過去について何も明確に語らない、ある種逆説的な物証として見られており、先のa島と同様ここでも、人工島は、人々に不安や脅威を感じさせる「カスタム」の存在を具現するものとなっているのである。

先に見たように「カスタム」から切り離された人々とみなされ、またそうした規定を自ら受け入れているアシの人々は、他面におい

てこのように、「カスタム」の具現化とみなされる人工島やその上のバエと、日常的に、逃れがたく向き合いながら生活している。次節では、本稿の結論として、一見矛盾するようにも見えるアシの人々と「カスタム」のこれらの関わりが、実際には単一の事態を構成することで、先に述べたような、「アシ」という同一性のゆらぎと「トロ」の「故地」への（再）移住への志向という動きを成り立たせていることを示す。

VI 考察と展望：「カスタム」をめぐる生成

前節で見たような、潜在的脅威としての「カスタム」の身近な存在に関して強調されるべきは、それが、現住地におけるアシの人々の生活を、つねに根底から揺さぶりうるものとなっているという点である。

a島のバエへのキリスト教式の埋葬や、同島の「祝別」に関わる語り、あるいはすぐ上の男性における、u島と自身の祖父に関わる意識について見たように、人工島に具現された「カスタム」は、アシの人々において多くの場合、現在なお清算されていない過去の「過ち」に関わるものとして意識されている。たとえば、a島のバエに埋葬された祭司の男性は、今日なお「間違った」仕方では埋葬されたままになっているのではないか、という疑問は、現在自分たちが暮らしているのはキリスト教化された空間の内部においてであるという、人々の日常的な理解をつねに不確かなものとする。同じように、無人の茂みとなってT村の沖合に浮かぶu島は、人々に対し、現在この地域で通用している親族関係や土地所有関係が、現時点では漠然と感じ取られているに過ぎない「真実」によって、全面的に転覆されうることを示唆し続ける。このように、アシの人々にとっての「カスタム」は、いくつもの段階に渡る移住史やキリスト教受容の結果として現在のアシ地域で成り立っている社会関係や居住それ自体を、多くの場合災いというかたちをとって、つねに潜在的に不安定化し問題化するものとなっているのである。

このように見れば、アシの人々が、人工島やその上のバエと接することにおいて「カスタム」と日常的に向き合っているということと、他方でこの人々が「カスタム」から切り離された人々とみなされていることとは、必ずしも矛盾しない。これら2つの側面はむしろ、この人々の現住地における居住・生活と「アシ」という同一性の問題化という状況を、ともに形作っているのである。

すなわち一方で、アシの人々は、たとえばT村周辺に見られるような、狭小な耕地が一面に密集する居住空間・景観の中で、現住地

における自らの生活の継続可能性が不確かなものであることを感覚・認識し、「祖先たちの土地」を離れ「カストム」を失った人々としての「アシ」という否定的な規定を受け入れるに至っている。他方、そのようなT村の沖合に広がる、一部が無人工化した人工島群は、「カストム」に関わる顕在的・潜在的な災いを通じて、一連の歴史的变化の産物としての現在の生活を不断に問題化し、人々に、自分たちの生活や集団の同一性は別様でもありうるということを思い起こさせる。このように「カストム」は、上で指摘した両義性のいずれの側面においても、現在の居住・生活と「アシ」という同一性を潜在的に不安定化し、そこに新たな動きを引き起こすものとしてある。本稿が、現在のアシにおいて「カストム」をめぐる生じている「生成」の状況として指摘するのは、まさしくこのような事態であり⁸、先に見た、祖先の移住史を想起することを通じて「トロ」の「故地」へ「帰ろう」とする現在の動きは、その顕著な表れといえる。

以上で見てきたように、今日のアシにおける「カストム」の観念は、再三の移住やキリスト教受容など、この人々が主として19世紀末以降に経験してきた一連の社会文化的变化についての、現在における再帰的・反省的な意識——たとえば「われわれはカストムを失ってしまった」というような——としてある。これらの変化の帰結が、現在のアシにおいて、安定状態からはほど遠い仕方を経験されていることは、以上から明らかであろう。加えて注目すべきは、今日におけるこのような不安定性が、過去の変化に関する意識それ自体が現在において新たな変化を生み出す——「われわれはカストムを失ってしまった」という意識が、「トロ」への移住の動向を引き起こすように——という、ある種循環的な運動として成り立っているという事実である。本稿は、アシの人々における「カストム」の観念に、従来のカストム論で通常想定されていた「歴史的变化」とは異なる、言うなれば現在それ自体に内在するこのような変化・動態を見出し、それをこそ民族誌的な記述の対象として位置付けようとするものである。

以上の考察はまた、従来のカストム論について、Ⅱ節で指摘したもう一つの問題点、すなわち人類学者の認識上の超越性という想定をも相対化する。先に述べた通り、80～90年代のカストム論は、(自)文化の客体化における人類学者と現地の人々の並行性を認識しつつも、そうした洞察を議論に内在化させることができずにいた。これに対し本稿は、民族誌的な記述の、言うなれば「内在的」な可能性を、「アシ」とその「カストム」(文化)という同一性が、現地の人々自身にとって不確かなものとなる「生成」の状況に、人類学者がともに入っていくことと自体に見出そうとする(図2と、Ⅱ節の図1を比較対照のこと)⁹。

8 なお、「カストム」へのこのような「生成」論的な視点は、まったく先例のないものではない。たとえば春日[1999]は、植民地統治の過程で固定化された慣習的土地所有制度が、現在のフィジーの人々において、「われわれ」に関わる「あるべき本来の現実」を不断に問題化し続けるものとして経験されていることを描き出している。こうした分析は、本稿の視角にも根本的に通じるものといえる。

9 フィールドワークおよび民族誌的記述を、このように、調査地の人々が体験している「生成」の状況に調査者が参与していくこととしてとらえる見方は、箭内[2002]が提示する「アイデンティティの識別不能地帯」の概念にもごく近いものと思われる。

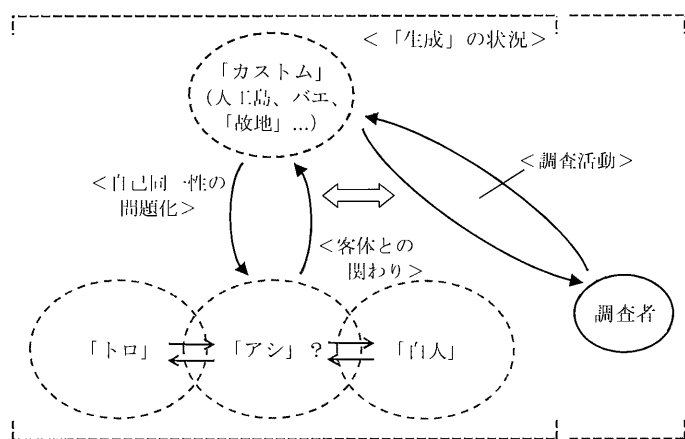


図2：本稿における「カスタム」をめぐる諸関係

最後に、アシの現状に、以上のような「生成」の契機を見出す本稿の考察は、人類学の現代的展開の中で、「カスタム」という主題やマライタ島という個別地域の限定をはるかに超える理論的射程をもつものと思われる。たとえば、ニューギニア高地の民族誌から出発し、80年代末以降人類学の理論的革新を主導してきたストラザーン (Marilyn Strathern) は、メラネシア人類学の古典的主题であるいわゆる「カーゴ・カルト」について取り上げた論文 [Strathern 1990] の中で、先に見たヴィヴェイロス・デ・カストロのアラウエテ民族誌にも根本的に通じる課題に取り組んでいる。

ストラザーンがそこで批判するのは、メラネシアの人々が、それまで見たこともない西洋人とその所有物に接して圧倒され、それらを自らの既存の文化的枠組みで理解しようとしたために、特異で非合理的な信仰を特徴とするカーゴ・カルトが生じたという、従来定型的であった説明である。ストラザーンは、このような説明の基底にある、メラネシアの人々は新しいものの体験を自ら生み出すことができず、そこにおいて変化や革新の契機は西洋人によって外的にのみもたらされうる、という西洋中心主義的な想定を徹底的に退ける。そしてそれに代えて、メラネシアにおける社会文化的実践の根底に、「予期されざるもの the unexpected」 [Strathern 1990: 30]、新たなものの体験の不断の産出という契機を見出し、カーゴ・カルトをもそうした運動の一つの表れとして理解し直そうとするのである。

メラネシアの社会・文化の根底的な一契機をなすそのような運動を概念化しようとするストラザーンの試みは、先に見たヴィヴェイロス・デ・カストロにおける、つねに自己と同一的であろうとする「未開社会」という古典的な想定を乗り越えようとする生成論的な志向とたしかに通じ合う。またここから、「カスタム」をめぐる動態を

従来の枠組みを離れてとらえ直す本稿の試みが、「生成」への関心をこれらの論者と共有しつつ、それを固有の民族誌的文脈において、人々の具体的な生のあり方として記述しようとするものであることも理解されるであろう。このように本稿は、マライタ島北部のアシという個別事例を手がかりに、同一性や自己／他者関係をめぐる伝統的な想定から自由な仕方で民族誌の可能性を再定義するという、より広汎な現代的課題への取り組みをなすものに他ならない。

謝辞

本稿は、トヨタ財団2007年度研究助成(助成番号:D07-R-0157)ならびに科学研究費補助金(特別研究員奨励費、課題番号:23・9761)の研究成果の一部である。また本稿の草稿は、第77回現代人類学研究会(2011年5月21日、於:東京大学駒場キャンパス)で発表された。コメンテーターを務めてくださった深田淳太郎氏(一橋大学)をはじめ、発表に対し貴重なコメントを下された方々にあらためて感謝したい。

参考文献

秋道 智彌

- 1976 「漁撈活動と魚の生態——ソロモン諸島マライタ島の事例」『季刊人類学』7(2): 76-131。

Burt, Ben

- 1982 Kastom, Christianity and the First Ancestor of the Kwara'ae of Malaita. *Mankind* 13(4): 374-399.

Corris, Peter

- 1973 *Passage, Port and Plantation: A History of Solomon Islands Labour Migration, 1870-1914*. Melbourne: Melbourne University Press.

Ivens, Walter G.

- 1978(1930) *The Island Builders of the Pacific*. New York, NY: AMS Press.

Jensen, Casper Bruun and Kjetil Rødje (eds.)

- 2010 *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*. New York, NY: Berghahn.

Jolly, Margaret

- 1982 Birds and Banyans of South Pentecost: Kastom in Anti-Colonial Struggle. *Mankind* 13(4): 338-356.

Jolly, Margaret and Nicholas Thomas (eds.)

- 1992 The Politics of Tradition in the Pacific. *Oceania* 62(4) (Special Issue).

春日 直樹

- 1999 「土地はなぜ執着を生むか——フィジーの歴史と現在をつうじて考える」『土地所有の政治史——人類学的視点』杉島敬志(編)、pp. 371-389、風響社。

Keesing, Roger M.

- 1982 Kastom and Anticolonialism on Malaita: 'Culture' as Political Symbol. *Mankind* 13(4): 357-373.

Keesing, Roger M. and Robert Tonkinson (eds.)

- 1982 Reinventing Traditional Culture: The Politics of Kastom in Island Melanesia. *Mankind* 13(4) (Special Issue).

Lindstrom, Lamont

- 1982 Leftamap Kastom: The Political History of Tradition on Tanna (Vanuatu). *Mankind* 13(4): 316-329.

Maranda, Pierre and Elli Kōngās Maranda

- 1970 La Crâne et l'utérus: deux théorèmes Nord-Malaitans. In *Échanges et communications. Mélanges offerts à Claude Lévi-Strauss à l'occasion de son 60ème anniversaire*. Jean Pouillon and Pierre Maranda (eds.), pp. 829-861. Paris: Mouton.

里見 龍樹

- 2011 「[海の民]」のトボジェニー——ソロモン諸島マライタ島北部の海上住民ラウ／アシにおける移住伝承と集団的アイデンティティ』『くにたち人類学研究』6: 26-53。

Satomi, Ryuju

- in press An Unsettling Seascape: *Kastom* and Shifting Identity among the Lau in North Malaita, Solomon Islands. *People and Culture in Oceania* 28.

Statistics Office

- c2001 *Report on 1999 Population and Housing Census: Basic Tables and Census Description*. Honiara: Statistics Office.

Strathern, Marilyn

- 1990 Artefacts of History: Events and the Interpretation of Images. In *Culture and History in the Pacific*. Jukka Siikala (ed.), pp. 25-44. Helsinki: The Finnish Anthropological Society.

Thomas, Nicholas

- 1992 The Inversion of Tradition. *American Ethnologist* 19(2): 213-232.

Tonkinson, Robert

- 1982 Kastom in Melanesia: Introduction. *Mankind* 13(4):

302-305.

Viveiros de Castro, Eduardo

- 1992 *From the Enemy's Point of View: Humanity and Divinity in an Amazonian Society*. (Catherine V. Howard trans.) Chicago, IL: University of Chicago Press.

White, Geoffrey

- 1993 Three Discourses of Custom. *Anthropological Forum* 6(4): 475-494.

White, Geoffrey and Lamont Lindstrom (eds.)

- 1993 Custom Today. *Anthropological Forum* 6(4) (Special Issue).

箭内 匡

- 2002 「アイデンティティの識別不能地帯で——現代マプーチェにおける「生成」の民族誌」『日常実践のエスノグラフィ——語り・コミュニティ・アイデンティティ』田辺繁治・松田素二(編)、pp. 214-234、世界思想社。